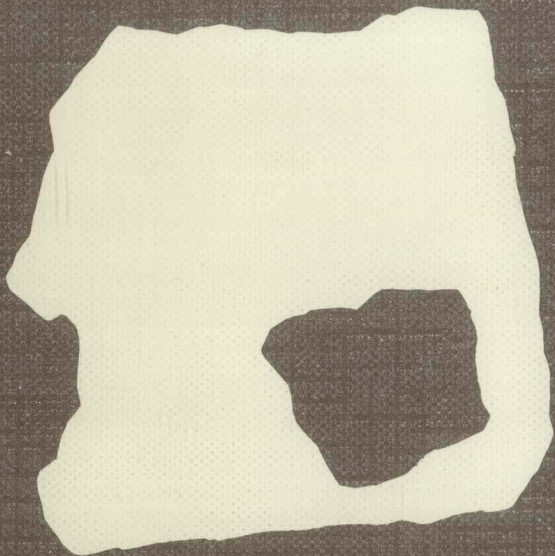


詩
集

生きている化石



大滝修一

詩集 生きてゐる化石 定価 二五〇〇円

一九九〇年三月一日発行

著 者 大滝修一

発行者 田村雅之

発行所 砂子屋書房

東京都千代田区内神田三十四一七

郵便番号 一〇一

電話 (二五六) 四七〇八

振替 東京 三一九七六三一

印刷所 金井印刷

製本所 並木製本

© Shuichi Otaki Printed in Japan 1990

詩集 生きている化石

砂子屋書房

目 次

I

生きている化石

荒地幻想
デザート

22

日本海

30

12

II

暗い紅彩

40

漂泊者

42

蝶

44

回廊の風

48

影の後ろ姿

52

紫の美学

54

光る時間

58

亡命者

60

絶滅部族

64

シベリアのルビー
マウス
鼠の嘆き 72 68

Ⅲ

十五夜の言葉 76

春の驟雨 78

左隣りの空席 80

望郷の海 82

墓地の櫓 84

夜のトンネル 86

男の城 88

断念 92

赤玉テントウムシ 94

キャンパスの雨傘 96

噂の広場 98

シルエット
影絵 100

Ⅳ

仮面と偶ひとがた

104

手紙にします

106

陽炎

110

春愁

114

薨と風船

116

少年の夏

118

小さな旅

120

白椿

124

目を閉じると

128

ローマ橋の見える城壁

130

自閉

134

鷗亭

136

Ⅴ

ドーバー海峡

140

故宮「シントラ」 144

ゴンザルベスカソアレスか 146

五月のイベント 150

暗い漣 154

つまらぬ奴 158

遠近法 162

未練 164

「無」を創る 166

「明珍風鈴」 168

確かめながら 170

リスボンのアントニオ・イサベル 172

自伝ふうにな 176

詩集
生きて
いる
化石

装
幀

郡

菊
夫

I

生きてゐる化石

荒地　そこには

飢餓と孤高が　生き続けている

いまもフロンティアの世紀を　引き継いで

自己浄化が　機能する古くて新しい空間

一つの旅の終りに　新たな旅が始まる

乾燥した地表にゆらぐ　陽光と熱気

地峡は　七色に変化し

遠い岩棚のステージでは　群衆が

天を仰いで　イカルスを悼んでいる

さらさらと　靴底の砂が囁く

欲望で翔ぶものは　欲望で堕ちる

嘆きは 遠くで見るものだ

ここには 何ひとつ余りものはない

無駄な行為も 許されない

不毛の風土に いく億年も

ぎりぎりの生態を保ってきた 生物たち

化石の仲間となった タランチュラ

彼らは 茫々たる地表の仮象を避け

無数の小穴に 身をひそめ

生きるため ハンティングの夜を待っている

荒地 そこは

生と死 有と無 昼と夜の

画然たる 住み分けの世界

四十三度に熱せられた 白光が

被写体の形なりに 乱反射し 気化し

さまざまに変化する 荒地の

乾燥した幻覚移入を　きっかけに
自己のなかの　他人が現われる

あの　成層火山口の霊地

下北　^{おそれさん}恐山の霊媒「いたこ」のように

幽明の彼方の　血縁を呼び

再生の利かない　自己回帰の石を積むことはないが

眉間^{みけん}に刻んだ　求心力で

ばらばらになっていた自己を呼び集める

白昼の荒地　思考だけは

真空地帯のように　自由だ

政治からいちばん離れて　遠いところ

モダニズムの　ペストに侵略されず

カルチュア亡者の　手は届かず

自然支配を　目論む

人間の驕りの　及ばぬところ

自己をみつめる　ラスト・チャンス

始原の素朴に あやかろう

十八歳の若い日の無常観に遡り

砂漠の天幕造りの 詩句を思い出す

へ無より有を生み出す 神よ

有の聖域に 無のわしを運んでくれ⁽¹⁾

と 神だのみもするが

盃の美酒をこぼせば その神も

へ酔っているのか おお神よ⁽²⁾

とたんに酒飲みの敵 瀆神の言葉となる

神の権威を 熟れた美酒で肉化し

暦法制定の大科学者ながら

自らはしがない天幕造りを 自称する

あの さり気なく逞しい

砂漠の 大いなる平凡は

六十年の歳月を経た いまも

自己浄化の 鏡なのか……